

お詫びと訂正

本誌 736 号（2020 年 2 月）掲載の論文について、執筆者から訂正の連絡と正誤表が届きましたので掲載します。読者の皆様には謹んでお詫びします。

2020年 2月 27日 『大原社会問題研究所雑誌』編集委員会

736 号（2020 年 2 月）

【特集】東アジア福祉レジームとダブルケア（1）東アジア比較と計量分析

上村一樹・中村亮介「ダブルケア経験者の就業状態および負担感についての分析」

正誤表

	誤	正
33 ページ 脚注(2)	社会生活基礎調査	社会生活基本調査
35～40 ページ 表 1-1, 1-2	年収（万円）	年収（万円）（注 2） （注 2）次の各選択肢（100万円未満, 100-200万円未満, 200-400万円未満, 400-600万円未満, 600-800万円未満, 800-1000万円未満, 1000-2000万円未満, 2000 万円以上）を（50万円, 150 万円, 300 万円, 500 万円, 700 万円, 900 万円, 1500万円, 2000万円）に変換した。
40 ページ 表 2	性別	女性ダミー
	所得	年収（万円）
	夫	夫（就業形態ダミー）
	妻	妻（就業形態ダミー）
52 ページ 14 行目	2017 年調査のみプラスである	2017 年調査のみマイナスである
52 ページ 16 行目	厳しめに予想する	楽観的に予想する
58 ページ 3 行目	(4) 子どもに腹が立つ	(4) を削除
58 ページ 4 行目	(4) 子どもに腹が立つ, の時	(4) を削除
60 ページ 17～18 行目	この結果は逆の因果関係が反映されたものだと考えられる。	この結果は逆の因果関係を示唆するものだと考えられる。
61 ページ 参考文献	黒田祥子（2014）「中間の年齢層の働き方——労働時間と会議時間の動向を中心に」『日本労働研究雑誌』No.653, pp.59-74。	黒田祥子（2014）「中間の年齢層の働き方——労働時間と介護時間の動向を中心に」『日本労働研究雑誌』No.653, pp.59-74。

ダブルケア経験者の就業状態 および負担感についての分析

上村 一樹・中村 亮介

はじめに

- 1 データ
- 2 ダブルケア経験と就業
- 3 ダブルケアの負担や影響はどのように規定されるのか
- 4 ダブルケアへの規範——子育て・介護

おわりに

はじめに

日本において、介護や育児は人々の行動を制限する要因となっている。例えば、厚生労働省による雇用動向調査の2017年の結果によれば、離職した労働者の離職理由のうち、「出産・育児」を理由とした離職者数は女性が約11万5千人（女性の離職者のうち3.1%）、「介護・看護」を理由とした離職者数は男性で約3万5千人（男性の離職者のうち1.0%）、女性で約5万7千人（女性の離職者数の1.5%）である⁽¹⁾。男性については「出産・育児」による離職者数は「該当なし」となっているが、男性離職者の1.0%、女性離職者の4.6%は出産・育児・介護を理由としたものである。では、「出産・育児」と「介護・看護」に同時に従事しなければならない場合、その人には就業状態や生活、心理的な面でどのような制限が生じるのであろうか。

本稿では、親のケア（介護）と我が子のケア（育児）の両方に同時に従事している者をダブルケア経験者と呼び、この人々の実態を明らかにしていく。そもそもダブルケアとは、相馬・山下（2013）によれば「子育てと介護の同時進行」と定義される概念であり、具体的に、彼女らは「親の介護と自分の娘の子ども（つまり孫）の育児」のダブルケアや「自分の親の介護と子どもの育児」のダブルケアといった状況を具体例として示している。また、アメリカにおいては自分の親と子どものケアを引き受けている世代はサンドイッチ世代（Sandwich generation）と呼ばれている（Cravey & Mitra 2011）。

日本において、現在、ダブルケアに従事している者がどれくらい存在するかについての推計値は、

(1) 雇用動向調査の調査票において、「介護・看護」の対象は親だけに限定されていない。障害を持つ家族（親、兄弟、親族、配偶者、子どもなど）の「介護・看護」である可能性も含まれている。

内閣府委託調査による NTT データ経営研究所（2016）の報告書が詳しい⁽²⁾。この報告書では 2012 年の就業構造基本調査に基づきダブルケア従事者の推計が行われており、その人数は男女合わせて 25 万 2900 人（男性 8 万 5400 人、女性 16 万 7500 人）であると報告されている⁽³⁾。また、同報告書の中では、国民生活基礎調査を用いてダブルケアを行っている世帯数も推計されており、その数は 2013 年において 16 万 6 千世帯であったことも示されている。

先述したように、相馬・山下（2013）において、ダブルケアという概念が提示され、その後、研究者だけでなく、日本社会においてもこの言葉やその状況が認識されるようになってきている⁽⁴⁾。この「ダブルケア」に着目して先行研究をサーベイした論文には浅野（2018）や澤田（2019）があり、これらの研究において、ダブルケア従事者がどのような負担感を持っているか、そして、ダブルケア従事者の支援制度がいかに構築されるべきか、就業状況（主にダブルケアによる離職）の把握などについて、詳細な検討が求められることが示されている。また、育児や介護の負担がない者と比較して、どのような属性を持つ者がダブルケア従事者になりやすいかについて検討した南（2018）では、就業形態や年齢が、ダブルケアのなりやすさに影響があることを示している。特に、その研究では「正規雇用」であることと比べて「経営者・役員」である場合には、ダブルケア従事者となりやすいことが示されている。

本稿は、この特集号において、大学生以下の子どものケアをすると同時に、自分の親の介護を同時に行わなければならない人の特徴をウェブ調査のデータを用いて定量的に明らかにすることを目的とする。本研究のデータは、ソニー生命保険株式会社、相馬直子氏、山下順子氏によって行われた共同調査「ダブルケアに関する調査 2017, 2018」の個票データである。データについては次節において詳述するが、大学生以下の子どもを持つ親に対して、ダブルケアの経験の有無、現在の就業状況、ダブルケア時の負担感などを尋ねている。本稿は浅野（2018）や澤田（2019）において指摘されてきたダブルケア経験者の就業状況や負担感について目を向け、それらの規定要因について、個票データを用いて定量的な視点から分析を行うものである。

本稿は以下のように構成されている。まず、次節において使用する「ダブルケアに関する調査 2017, 2018」データの特徴を説明する。次にデータに基づきダブルケア従事者の特徴を記述したうえで、ダブルケア経験と就業行動との関係性を説明する。さらに、ダブルケアの負担や日常生活への影響に関する規定要因の分析結果を示す。そして、ダブルケアへの規範の規定要因を明らかにする。最後に、この研究から明らかになった点、今後の研究において検討すべき課題について示す。

(2) 黒田（2014）は社会生活基礎調査に基づき、ダブルケア従事者の数を約 24 万人（男性約 7 万人、女性約 17 万人）であると推計している。

(3) 同時に、就業構造基本調査に基づき推計された子育て従事者は 999 万 5200 人、介護従事者は 557 万 3800 人であると、同報告書には示されている。なお、この報告書が用いた就業構造基本調査では、「育児」とは未就学児の世話を指し、「介護」とは日常生活の手助けをすることであると定義されている。

(4) ソニー生命株式会社・相馬・山下（2017）によれば、「ダブルケア」という言葉を聞いたことがある人の割合は 12.6%であった。

1 データ

本稿で用いるデータは、ソニー生命株式会社、相馬直子氏、山下順子氏が共同で実施した二つの調査である。一つは「ダブルケアに関する調査 2017」(以下、2017 年調査)であり、もう一つは「ダブルケアに関する調査 2018」(以下、2018 年調査)である⁽⁵⁾。二つのデータの特徴をソニー生命株式会社・相馬・山下(2017, 2018)に基づいて確認すると、いずれのデータもネットエイリアリサーチのモニター会員を対象にしたインターネット調査であり、対象は全国かつ大学生以下の子どもを持つ父親または母親である。二つのデータの大きな違いは 2018 年調査ではダブルケア経験者に調査対象を限定している点であり、2017 年調査にはその限定がない点である。よって、2017 年調査からは主に子育てのみ経験者の情報を入手することができ、2018 年調査からダブルケア経験者の情報を入手することができる。これらの特性を持つデータを使うことで、ダブルケア経験の有無が、人々の行動にどのような影響を与えるかの比較を可能にする。

本稿において、ダブルケア経験者とは自分の子どもの育児と親の介護を同時に行っている者もしくは行っていた者を指す。これは、2017 年調査の質問「あなたの子育てと親・義理の親の介護(疾病・障がい・認知症等)が同時期に発生する状況(ダブルケア)について、当てはまるものを選んでください。」に基づいている。その質問の選択肢は「現在ダブルケアに直面中」「過去にダブルケアを経験」「現在直面中で、過去にも経験がある」「数年先にダブルケアに直面する」「ダブルケアに直面していない」であり、現在、過去、そして、その両方の時点においてダブルケアに従事していた者を本稿におけるダブルケア経験者とした。

本稿で用いたダブルケアの定義は既存の調査よりも広い概念となっている⁽⁶⁾。2017 年調査、2018 年調査における「育児」をしていることの定義は大学生以下の子どもの世話をしていることである。また、「介護」の定義は自分の両親および義理の両親の世話をしていることであるが、その世話の内容には実際に自分自身が世話をすることだけでなく、ケアマネージャーとの調整、経済的援助などの内容が含まれている。この定義は未就学児の世話を「育児」とし、実際に日常生活の世話をしていることをもって「介護」に従事している者とする「就業構造基本調査」の定義よりも広い概念となっている⁽⁷⁾。

(5) 2017 年調査は 2016 年 10 月から 11 月にかけて実施されており、調査対象者は男性 1050 人、女性 1050 人となっている。また、2018 年調査は 2018 年 2 月から 3 月にかけて実施されており、調査対象者は男性は 500 人、女性は 500 人となっている(ソニー生命株式会社・相馬・山下 2017, 2018)。

(6) ダブルケアの概念定義に関する詳細は、本特集の相馬・他論文を参照。

(7) NTT データ経営研究所(2016)の独自調査では育児の対象を「小学生以下」とし、介護の対象を自身の(義理の)親と(義理の)祖父母としている。また介護において「金銭的な援助のみ」を行う場合は、介護者に含まないとしている。

表 1-1 計量分析に使うデータの記述統計 (2017 年調査)

変数名	詳細	サンプル サイズ	平均	標準偏差	最小値	最大値
ダブルケア経験あり ダミー	ダブルケア経験あり = 1 育児のみ経験 = 0	2,100	0.066	0.248	0	1
金銭的余裕がない (注 1)	いまの暮らしを考えれば、ダブルケアにかかる金銭的な余裕がないと思うことがありますか (ありましたか)	2,100	2.962	1.472	1	5
時間が取れない (注 1)	ダブルケアのために自分の時間が十分に取れないと思いますか (思いましたか)	2,100	3.010	1.450	1	5
人付き合いに支障 (注 1)	ダブルケアがあるので家族や友人と付き合いづらくなっていると思いますか (思いましたか)	2,100	2.885	1.437	1	5
体調不良 (注 1)	ダブルケアのために体調を崩したと思ったことがありますか (ありましたか)	2,100	2.526	1.375	1	5
生活が不自由 (注 1)	ダブルケアが始まって以来、自分の思い通りの生活ができなくなったと思うことがありますか (ありましたか)	2,100	2.802	1.433	1	5
仕事と家庭の両立 (注 1)	ダブルケアのほかに家事や仕事などもこなしていかなければならず「ストレスだな」と思うことがありますか (ありましたか)	2,100	3.062	1.448	1	5
子どもに腹が立つ (注 1)	子どものそばにいると腹が立つことがありますか (ありましたか)	2,100	2.504	1.350	1	5
要介護者に腹が立つ (注 1)	介護を受けている方のそばにいると腹が立つことがありますか (ありましたか)	2,100	2.607	1.361	1	5
子育てを頑張るべき (注 1)	自分は今以上にもっと頑張って子育てすべきだと思うことがありますか (ありましたか)	2,100	2.659	1.352	1	5
介護を頑張るべき (注 1)	自分は今以上にもっと頑張って介護すべきだと思うことはありますか (ありましたか)	2,100	2.450	1.306	1	5
周囲にダブルケア経験者が居るダミー	居る = 1, 居ない = 0	2,100	0.100	0.300	0	1
支え = 配偶者	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は配偶者 (パートナー) (はい・いいえ)	2,100	0.480	0.500	0	1
支え = 子ども	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は子ども (はい・いいえ)	2,100	0.186	0.389	0	1
支え = 親	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は親・義理の親 (はい・いいえ)	2,100	0.062	0.242	0	1

支え = 兄弟	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人はきょうだい(はい・いいえ)	2,100	0.175	0.380	0	1
支え = 親戚	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は親戚(はい・いいえ)	2,100	0.025	0.157	0	1
支え = 友人	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は友人(はい・いいえ)	2,100	0.023	0.149	0	1
支え = 近隣・その他	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は近所の人・民生委員・その他(はい・いいえ)	2,100	0.034	0.182	0	1
支え = 介護関係	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は介護施設職員・地域包括支援センター職員・ケアマネージャー・ヘルパー(はい・いいえ)	2,100	0.112	0.316	0	1
支え = 医療関係	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は医師・看護師・保健師(はい・いいえ)	2,100	0.020	0.138	0	1
支え = 教育関係	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は保育園職員・幼稚園職員・学校関係者(学童含む)・療育・障害者施設職員・その他子育て支援関係者(はい・いいえ)	2,100	0.016	0.124	0	1
要支援度 / 要介護度 (親の中で最高段階)	本人および義理の両親、最大4名の中で最も要介護度が高い者の要介護度(要支援度=1, 2の場合は1, 2になり、要介護度=1, 2, 3, 4, 5の場合はそれぞれ3, 4, 5, 6, 7)	2,100	0.532	1.511	0	7
末子の年齢		2,100	11.607	6.160	1	23
女性ダミー	女性 = 1, 男性 = 0	2,100	0.500	0.500	0	1
年齢		2,100	44.170	6.725	25	55
第一子ダミー	第一子 = 1, その他 = 0	2,100	0.561	0.496	0	1
姉妹ありダミー	姉妹あり = 1, なし = 0	2,100	0.522	0.500	0	1
有配偶ダミー	配偶者あり = 1, なし = 0	2,100	0.951	0.215	0	1
パート・非正規等ダミー	正規雇用以外の形(パート, 非正規, 自営業など)で就業中 = 1 その他 = 0	2,100	0.239	0.427	0	1
正規雇用ダミー	正規雇用で就業中 = 1 その他 = 0	2,100	0.498	0.500	0	1
就業中(全就業形態含む)ダミー	何らかの形で就業中 = 1 非就業 = 0	2,100	0.737	0.441	0	1
現在の職場で働き続けた いダミー	該当する場合 = 1 しない場合 = 0	1,547	0.744	0.437	0	1
現在の職場での勤続年数 (1ヶ月=1/12年で換算)		1,547	12.730	9.387	0	37.5
年収(万円)		2,100	671.500	390.649	50	2,000
妻(女性)が就業	妻(女性)が就業中(全就業形態含む)なら = 1, 非就業 = 0	2,076	0.577	0.494	0	1

夫（男性）が就業	夫（男性）が就業中（全就業形態含む）なら = 1, 非就業 = 0	2,022	0.970	0.170	0	1
妻（女性）が正規雇用	妻（女性）が正規雇用 = 1 その他 = 0	2,076	0.190	0.390	0	1
夫（男性）が正規雇用	夫（男性）が正規雇用 = 1 その他 = 0	2,022	0.840	0.370	0	1
妻の年齢		2,076	43.200	6.527	23	60
夫の年齢		2,022	45.452	6.935	19	67

注1：選択肢は、思わない（思わなかった）= 1, たまに思う（たまに思った）= 2, 時々思う（時々思った）= 3, よく思う（よく思った）= 4, いつも思う（いつも思った）= 5

表1-2 計量分析に使うデータの記述統計（2018年調査）

変数名	詳細	サンプルサイズ	平均	標準偏差	最小値	最大値
現在, ダブルケア経験中	ダブルケア経験中 = 1 過去にのみ経験 = 0	1,000	0.543	0.498	0	1
金銭的余裕がない（注1）	いまの暮らしを考えれば, ダブルケアにかかる金銭的な余裕がないと思うことがありますか（ありましたか）	1,000	2.846	1.335	1	5
時間が取れない（注1）	ダブルケアのために自分の時間が十分に取れないと思いますか（思いましたか）	1,000	2.763	1.241	1	5
人付き合いに支障（注1）	ダブルケアがあるので家族や友人と付き合いづらくなっていると思いますか（思いましたか）	1,000	2.577	1.249	1	5
体調不良（注1）	ダブルケアのために体調を崩したと思ったことがありますか（ありましたか）	1,000	2.228	1.162	1	5
生活が不自由（注1）	ダブルケアが始まって以来, 自分の思い通りの生活ができなくなったと思うことがありますか（ありましたか）	1,000	2.659	1.232	1	5
仕事と家庭の両立（注1）	ダブルケアのほかに家事や仕事などもこなしていかなければならず「ストレスだな」と思うことがありますか（ありましたか）	1,000	2.872	1.257	1	5
子どもに腹が立つ（注1）	子どものそばにいと腹が立つことがありますか（ありましたか）	1,000	2.160	1.094	1	5
要介護者に腹が立つ（注1）	介護を受けている方のそばにいと腹が立つことがありますか（ありましたか）	1,000	2.373	1.153	1	5
子育てを頑張るべき（注1）	自分は今以上にもっと頑張って子育てすべきだと思うことがありますか（ありましたか）	1,000	2.556	1.167	1	5

介護を頑張るべき(注1)	自分は今以上にもっと頑張って介護すべきだと思うことはありますか(ありましたか)	1,000	2.235	1.083	1	5
周囲にダブルケア経験者が居るダミー		1,000	0.251	0.434	0	1
支え=配偶者	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は配偶者(パートナー)(はい・いいえ)	1,000	0.637	0.481	0	1
支え=子ども	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は子ども(はい・いいえ)	1,000	0.284	0.451	0	1
支え=親	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は親・義理の親(はい・いいえ)	1,000	0.170	0.376	0	1
支え=親戚	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は親戚(はい・いいえ)	1,000	0.077	0.267	0	1
支え=友人	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は友人(はい・いいえ)	1,000	0.072	0.259	0	1
支え=近隣・その他	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は近所の人・民生委員・その他(はい・いいえ)	1,000	0.211	0.408	0	1
支え=介護関係	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は介護施設職員・地域包括支援センター職員・ケアマネージャー・ヘルパー(はい・いいえ)	1,000	0.105	0.307	0	1
支え=医療関係	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は医師・看護師・保健師(はい・いいえ)	1,000	0.038	0.191	0	1
支え=教育関係	ダブルケアで大変な時、支えてくれた人は保育園職員・幼稚園職員・学校関係者(学童含む)・療育・障害者施設職員・その他子育て支援関係者(はい・いいえ)	1,000	0.029	0.168	0	1
要支援度/要介護度(親の中で最高段階)	本人および義理の両親の中で最も要介護度が高い者の要介護度(要支援度=1, 2の場合は1, 2になり, 要介護度=1, 2, 3, 4, 5の場合はそれぞれ3, 4, 5, 6, 7)	1,000	1.299	2.140	0	7
末子の年齢		1,000	11.649	6.795	1	24
女性ダミー	女性=1, 男性=0	1,000	0.500	0.500	0	1
年齢		1,000	44.312	7.304	30	55
第一子ダミー	第一子=1, その他=0	1,000	0.519	0.500	0	1
姉妹ありダミー	姉妹あり=1, なし=0	1,000	0.495	0.500	0	1
有配偶ダミー	配偶者あり=1, なし=0	1,000	0.938	0.241	0	1
パート・非正規等ダミー	正規雇用以外の形(パート, 非正規, 自営業など)で就業中=1, その他=0	1,000	0.239	0.427	0	1

正規雇用ダミー	正規雇用で就業中 = 1 その他 = 0	1,000	0.536	0.499	0	1
現在の職場で働き続けた いダミー	該当する場合 = 1 しない場合 = 0	775	0.803	0.398	0	1
就業中(全就業形態含 む)ダミー	何らかの形で就業中 = 1 非就業 = 0	1,000	0.775	0.418	0	1
現在の職場での勤続年数 (1ヶ月=1/12年で換算)		775	12.350	9.654	0	53.25
就業時間 (カテゴリー変数)	1 1時間以内 2 1時間超～2時間以内 3 2時間超～3時間以内 4 3時間超～4時間以内 5 4時間超～5時間以内 6 6時間超～7時間以内 7 7時間超～8時間以内 8 8時間超～9時間以内 9 9時間超～10時間以内 10 10時間超	775	7.446	1.914	1	10
年収(万円)		1,000	724.700	419.674	50	2,000
妻(女性)が就業	妻(女性)が就業中なら = 1 非就業 = 0	981	0.637	0.481	0	1
夫(男性)が就業	夫(男性)が就業中なら = 1 非就業 = 0	957	0.980	0.140	0	1
妻(女性)が正規雇用	妻(女性)が正規雇用 = 1 その他 = 0	981	0.269	0.444	0	1
妻(女性)が正規雇用	夫(男性)が正規雇用 = 1 その他 = 0	957	0.834	0.372	0	1
妻の年齢		981	43.210	7.360	10	56
夫の年齢		957	45.610	7.860	25	70

注1: 選択肢は、思わない(思わなかった) = 1, たまに思う(たまに思った) = 2, 時々思う(時々思った) = 3, よく思う(よく思った) = 4, いつも思う(いつも思った) = 5

2 ダブルケア経験と就業

本節では、まず、記述的分析によってダブルケア経験者の世帯収入、就業状態、勤続年数といった経済状況に焦点を当てる。さらに、就業状態について、計量経済学のモデルに基づき推定を行い、変数間の関係を明らかにする。

まず、本稿で用いる変数の定義および記述統計を確認しておく。定義については、表1-1および表1-2のとおりである⁽⁸⁾。ここでは、特筆すべき変数についてのみ、その傾向を概括する。表

(8) 要支援度・要介護度を統一した変数として扱うために、要支援度は数値をそのまま用いて、要介護度は数値に2を加えたものを分析に用いている。

1-1は2017年調査、表1-2は2018年調査の記述統計である。なお、上述したとおり、2017年調査は、ダブルケア経験者であるかどうかを問わず（少なくとも育児というケアを経験している者）を対象に調査を行っており、2018年調査はダブルケア経験者のみに調査を行っている。したがって、両者の記述統計を直接比較することは難しい。

それを踏まえたうえで、表1-1より、2017年調査でのダブルケア経験者はおよそ6.6%であった。この数値をどう捉えるかという問題はあるが、少なくとも無視できるような割合ではないといえよう。また、詳細は表に掲載していないが、2017年のダブルケア経験者のうち77.2%が現在進行形でダブルケアに従事している。次に、表1-2より、2018年調査において、現在もダブルケア中なのは調査回答者の54.3%である。言い換えれば、約半数は、過去にダブルケア経験こそあるが、現在はダブルケアを行っていないという状況である。

次に、2017年調査を使って、ダブルケア経験の有無と経済状況の関係について確認する（表2）。2017年調査のみを用いるのは、この調査がダブルケア経験者と子育てのみ経験者を両方含んだデータであり、その違いが把握できるためである。ただし、この2017年調査において子育てのみ経験者であるとは、大学生以下の子どもの子育て中であることを意味する。

表1-1で確認した記述統計のうち、経済状況にかかわる変数として、世帯所得、就業状況、勤続年数を抽出し、ダブルケア経験者と子育てのみ経験者の間での違いを説明する。まず、ダブルケア経験者と子育てのみ経験者の間で性別や年齢の差はほとんどない。その一方で、世帯年収はダブルケア経験者の方が高い傾向が確認できる。夫の現在の就業形態については顕著な差は認められないが、妻の現在の就業形態についてはダブルケア経験者の方が正社員である割合が高くなっている。

表2 ダブルケア経験者と子育てのみ経験者の属性の比較

	ダブルケア経験者			子育てのみ経験者		
	平均	標準偏差	サンプルサイズ	平均	標準偏差	サンプルサイズ
性別	0.486	0.502	138	0.501	0.500	1962
年齢	44.558	7.075	138	44.142	6.701	1962
所得	772.464	441.550	138	664.399	385.950	1962
夫						
正社員	0.863	0.346	131	0.837	0.369	1891
パート・アルバイト	0.008	0.087	131	0.016	0.125	1891
派遣社員・契約社員・嘱託	0.000	0.000	131	0.026	0.160	1891
自営業・家業	0.084	0.278	131	0.079	0.269	1891
主婦・主夫（専業）	0.008	0.087	131	0.019	0.137	1891
妻						
正社員	0.314	0.466	137	0.177	0.382	1939
パート・アルバイト	0.292	0.456	137	0.319	0.466	1939
派遣社員・契約社員・嘱託	0.044	0.205	137	0.035	0.183	1939
自営業・家業	0.044	0.205	137	0.027	0.162	1939
主婦・主夫（専業）	0.248	0.434	137	0.419	0.493	1939
勤続年数	13.046	9.761	114	12.705	9.360	1433

勤続年数についてもダブルケア経験者の方がより長い傾向になっている。

これらのことは、世帯年収が高く、就業形態が安定している世帯ほどダブルケアを引き受けやすいことを示唆するものである。親の介護、および子育てを同時に行うためには金銭面と時間面での余裕が必要となる。ダブルケア経験者の中で妻の就業形態が正社員である者が多いということは、ダブルケアを行うためには金銭面での余裕が必要なことの裏付けといえる。

（1）ダブルケアを経験しているのは誰か

では、ダブルケアを経験する確率が高い人は誰なのか。表3は、被説明変数をダブルケアの有無（0＝経験なし、1＝経験あり）として、プロビット・モデルによる分析を行った際の結果である。被説明変数の定義から、数値がプラスだと、ダブルケア経験確率にプラスの影響で、数値がマイナスだと、ダブルケア経験確率にマイナスの影響である。以下では、統計的に有意であった結果についてのみ注目する。

まず、女性は、ダブルケア経験確率が高い。これは、家事育児あるいは介護等が女性に偏りやすい、という日本の現状を反映したものであるといえる。ダブルケア経験者の育児や介護に対する規範の内在化という点は後述する。

表3 ダブルケア経験の規定要因（2017年調査）

被説明変数	ダブルケア経験あり (比較対象：育児のみ経験)
分析方法	プロビット・モデル
説明変数	
女性ダミー	0.210* (0.125)
年齢	0.001 (0.007)
第一子ダミー	- 0.121 (0.087)
姉妹ありダミー	- 0.003 (0.087)
有配偶ダミー	- 0.126 (0.195)
パート・非正規等ダミー	0.264** (0.131)
正規雇用ダミー	0.395*** (0.150)
年収(万円)	0.000*** (0.000)
定数項	- 1.965*** (0.397)
サンプルサイズ	2,100

注) *の数は統計的有意水準を表しており、*は10%、**は5%、***は1%水準で有意であることを表す。カッコ内は標準誤差を示す。

次に、正規雇用である者（正規雇用ダミー = 1）や、パート・非正規等に就業している者（パート・非正規等ダミー = 1）についても、ダブルケア経験確率が高い。さらには、年収についても、年収が高いほど、ダブルケア経験確率が高い。これらの結果はどのように読み取れるだろうか。一つの可能性ではあるが、経済的安定があるほど、ダブルケアを行う余裕がある、という考え方ができる。年収が高い、あるいは正規雇用に就いているなどの情報は、当事者の生活に余裕があることを表す。言い換えれば、生活に余裕がないと、本人の意欲、意思にかかわらず、ダブルケアを行うことが難しいのかもしれない。この傾向は南（2018）と同様の傾向であり、南（2018）では正規社員よりもより年収が高いと考えられる経営者などの方がダブルケアを引き受ける確率が高いことを示している。

（2）ダブルケアを経験していることで、就業行動は変わるのか

表4は、2017年調査を用いて分析した結果である。左から順に、①就業の有無（0 = 就業なし、1 = 就業あり）、②正規雇用かどうか（0 = 正規雇用ではない、1 = 正規雇用）、③現在の職場で働き続けたいか（現在就業中の者のみ、0 = 継続の意思なし、1 = 継続の意思あり）、最後に、④現在の職場での勤続年数（質問は月単位なので、1ヶ月 = 1 / 12年で年単位に換算）を被説明変数として、分析を行った際の結果である。被説明変数の特徴に応じて、分析方法を適宜変えている。具体的には、④現在の職場での勤続年数は連続変数であるため、OLSによる分析を行い、その他の変数に

表4 ダブルケアが就業に与える影響（2017年調査）

	①	②	③	④
被説明変数	就業中（全就業形態含む）ダミー	正規雇用ダミー	現在の職場で働き続けたいダミー	現在の職場での勤続年数（1ヶ月 = 1 / 12年で換算）
分析方法	プロビット・モデル	プロビット・モデル	プロビット・モデル	OLS
説明変数				
ダブルケア経験ありダミー	0.406** (0.166)	0.381** (0.149)	0.035 (0.144)	1.474* (0.862)
女性ダミー	- 2.163*** (0.103)	- 2.257*** (0.074)	0.221*** (0.079)	- 7.243*** (0.463)
要支援度 / 要介護度（親の中で最高段階）	- 0.012 (0.027)	- 0.029 (0.025)	- 0.003 (0.025)	- 0.187 (0.149)
末子の年齢	0.017* (0.009)	- 0.003 (0.008)	0.003 (0.008)	0.089* (0.048)
年齢	- 0.001 (0.008)	- 0.014* (0.008)	0.016** (0.008)	0.371*** (0.046)
有配偶ダミー	- 0.819*** (0.164)	- 0.282* (0.150)	0.392*** (0.149)	1.032 (0.926)
定数項	2.737*** (0.351)	2.025*** (0.320)	- 0.527* (0.317)	- 3.532* (1.935)
サンプルサイズ	2,100	2,100	1,547	1,547

注）*の数は統計的有意水準を表しており、*は10%、**は5%、***は1%水準で有意であることを表す。
カッコ内は標準誤差を示す。

については、0か1かの二値変数であるため、プロビット・モデルを用いている。

被説明変数の定義から、数値がプラスだと、①就業している確率、②正規雇用である確率、③現在の職場で働き続けたいと考える確率、④現在の職場での勤続年数にプラスの影響がある。数値がマイナスの場合はその逆である。また、以下では、統計的に有意であった結果についてのみ注目する。

まず、ダブルケアを経験していると、①就業中である確率、②正規雇用である確率、④現在の職場での勤続年数が上昇している。このうち、①就業中である確率、②正規雇用である確率については、表3の結果で述べたとおり、この分析とは逆の因果関係が反映されていると考えられる。つまり、ダブルケアを経験しているから、職に就いている確率や正規雇用である確率が上がるのではなく、職に就いている、正規雇用である場合に、ダブルケアを経験している確率が上がるのであろう。④勤続年数についても、同様のことがいえる。つまり、ダブルケアを経験しているから勤続年数が長いのではなく、長い間働いている職場であれば、周囲の理解が得やすくなっていることから、ダブルケアを経験している確率が高いのではないか。

次に、女性ダミーについては③を除く全ての場合でマイナスであり、これは、女性の方が就業確率、正規雇用である確率は低く、育児介護などで職を辞さないといけないうことが多いために④現在の職場での勤続年数が短いからであろう。女性の方が③現在の職場で働き続けたいと思う傾向にあるのは、男性の方が女性よりも次の職が見つかりやすいからであろうか。

また、末子年齢が高いと、①就業中である確率が高い。これは、末子の年齢が上がると、仕事に出やすくなるからであろう。末子の年齢が高いと④現在の職場で働き続けたいと思う傾向にあるのは、末子の年齢が高いと、子育てのために職を変える必然性が薄れるからだと考えられる。

その他、年齢が高いと②正規雇用である確率が低下するのは、年齢とともに正規から嘱託などへの切り替えが行われるからであろう。また年齢が高いと③現在の職場で働き続けたいと思う確率が高くなるのは、年齢が上がると、次の職が見つかりにくいからだと考えられる。年齢が高いと勤続年数が長いことについては、勤続年数の定義から自然な結果である。

（3）ダブルケア経験が現在か過去かで、就業行動は変わるのか

表5は、2018年調査を用いて分析した結果である。①から④までは、2017年調査のときと同様である。2018年調査のみの項目として、就業時間に関する質問がある。就業時間の選択肢は、「1時間以内（数値1を割り当て）」「1時間超～2時間以内（数値2）」「2時間超～3時間以内（数値3）」「3時間超～4時間以内（数値4）」「4時間超～5時間以内（数値5）」「6時間超～7時間以内（数値6）」「7時間超～8時間以内（数値7）」「8時間超～9時間以内（数値8）」「9時間超～10時間以内（数値9）」「10時間超（数値10）」である。このように、⑤就業時間は、順序つきの離散変数であるため、順序プロビット・モデルを用いている。

被説明変数の定義から、数値がプラスだと、①就業している確率、②正規雇用である確率、③現在の職場で働き続けたいと考える確率、④現在の職場での勤続年数、⑤就業時間にプラスの影響がある。数値がマイナスの場合はその逆である。また、以下では、統計的に有意であった結果についてのみ注目する。

表5 ダブルケアが就業に与える影響 (2018年調査)

	①	②	③	④	⑤
被説明変数	就業者中(全就業形態含む)ダミー	正規雇用ダミー	現在の職場で働き続けたいダミー	現在の職場での勤続年数(1ヶ月=1/12年で換算)	就業時間(カテゴリ変数)
分析方法	プロビット・モデル	プロビット・モデル	プロビット・モデル	OLS	順序プロビット・モデル
説明変数					
現在, ダブルケア経験中	0.164 (0.111)	0.061 (0.099)	- 0.017 (0.108)	0.006 (0.611)	- 0.115 (0.078)
女性ダミー	- 1.999*** (0.151)	- 1.902*** (0.099)	0.258** (0.113)	- 6.494*** (0.622)	- 1.135*** (0.084)
要支援度/要介護度(親の中で最高段階)	0.007 (0.026)	- 0.004 (0.023)	0.015 (0.025)	0.073 (0.141)	- 0.006 (0.018)
末子の年齢	- 0.004 (0.014)	- 0.008 (0.012)	- 0.017 (0.013)	0.046 (0.071)	- 0.011 (0.009)
年齢	- 0.003 (0.013)	- 0.033*** (0.011)	0.023** (0.011)	0.526*** (0.064)	0.011 (0.008)
有配偶ダミー	- 0.737*** (0.225)	- 0.406** (0.182)	0.046 (0.208)	- 0.144 (1.177)	0.035 (0.149)
/cut1					- 2.684*** (0.343)
/cut2					- 2.596*** (0.339)
/cut3					- 2.158*** (0.328)
/cut4					- 1.757*** (0.324)
/cut5					- 1.218*** (0.321)
/cut6					- 0.891*** (0.319)
/cut7					- 0.234 (0.318)
/cut8					0.569* (0.318)
/cut9					1.042*** (0.320)
定数項	2.911*** (0.511)	3.005*** (0.430)	- 0.102 (0.435)	- 9.029*** (2.497)	
サンプルサイズ	1,000	1,000	775	775	775

注) *の数は統計的有意水準を表しており, *は10%, **は5%, ***は1%水準で有意であることを表す。
カッコ内は標準誤差を示す。

まず、女性ダミーについては、表4の結果と酷似している。年齢、有配偶ダミーについても、表4の結果とほとんど同様である。これらのことから、2017年調査と2018年調査で、回答者の特質が大きく異なるということはないと考えられる。異なる点は、2017年調査は大半が子育てのみ経験者、ごく一部がダブルケア経験者である一方、2018年調査では、全員がダブルケア経験者であり、何割かが現在ダブルケア経験中、残りは過去にダブルケア経験があり、現在はダブルケア中ではない、ということのみであるといえよう。2017年調査、2018年調査の、データとしての特徴が類似しているため、表5の結果と表4の結果には、一定程度の比較可能性がある。

次に、現在ダブルケア経験中であるか、それとも、過去にダブルケアを経験し、現在はダブルケア状態にないのかは、就業行動に影響しない。表4では、ダブルケア経験者かどうかで、就業行動が異なっていた。しかし、この結果は、逆の因果関係を反映したものである可能性が高いことを指摘した。表3の結果からも示唆されるように、正規雇用など、経済的安定があるために、ダブルケア経験者である確率が高い、というのが、正しい因果関係であると思われる。さて、「現在、ダブルケア経験中」が1（該当）か0（非該当）かの違いは、ダブルケアを行っているのがいつの時点であるかの違いだけである。つまり、どちらも、ダブルケア経験者であることに変わりはない。そのため、どちらも、同程度に経済的安定がある人たちであると考えられる。そうすると、表4のときとは異なり、「正規雇用など、経済的安定があるほど、現在、ダブルケア経験中である確率が高い」とはならないのであろう。

（4）ダブルケアと就業行動の関係性に男女差はあるのか

今回、分析に用いている調査では、本人に関する質問項目に加えて、配偶者に関する質問項目も存在する。また、調査対象者のほとんどが、調査時点において、有配偶者である。すると、ほとんどの調査対象者については、「妻のデータ」と「夫のデータ」が存在することになる⁽⁹⁾。そこで、ダブルケア経験と就業行動の関係について、男女別に分析することを考える。上述のとおり、一部の調査対象者は有配偶者ではない。それらの者については、本人の就業行動しか分からない。有配偶者でない者もいることを踏まえて、以下の分析では、「妻（女性）の就業行動」と、「夫（男性）の就業行動」に分けて分析を行う。つまり、次頁の表6のようにデータを組み替えたうえで分析を行っている。

まず、2017年調査で分析を行った結果が、表7である。表7の分析は、表4の分析を男女別に行ったものともみなせる。以下では、統計的に有意であった結果についてのみ注目する。

ここでも、①③つまり女性の場合のみ、ダブルケア経験ありダミーがプラスになっている。表3や表4では、「経済的安定があるほど、ダブルケア経験率が高い」と述べた。表7では、女性の場合のみ、ダブルケア経験ありダミーがプラスになっているため、ダブルケアを行うための「経済的安定」とは、男性の働き方で決まるのではなく、女性の働き方で決まると考えられる。

(9) 調査対象者が男なら、「本人に関するデータ＝夫のデータ」であり、「配偶者に関するデータ＝妻のデータ」である。一方で、調査対象者が女なら、「本人に関するデータ＝妻のデータ」であり、「配偶者に関するデータ＝夫のデータ」になる。

表6 男女別分析に用いる変数の定義

調査対象者の性別	配偶者	本人の就業行動	配偶者の就業行動
男	あり	夫(男性)の就業行動	妻(女性)の就業行動
男	なし	夫(男性)の就業行動	
女	あり	妻(女性)の就業行動	夫(男性)の就業行動
女	なし	妻(女性)の就業行動	

次に、2018年調査で分析を行った結果が、次頁表8である。表8の分析は、表5の分析を男女別に行ったものともみなせる。以下では、統計的に有意であった結果についてのみ注目する。

ここでは、表5と異なり、現在、ダブルケア経験中の者は、過去にダブルケア経験しており、現在ダブルケアしていない者と比べて、①妻(女性)が就業している確率が高い、という結果になっている。先ほども述べたとおり、この結果は、逆の因果関係を反映したものであると考えられる。ではなぜ、表5の結果と異なるのだろうか。一つの考え方としては、現在、ダブルケア経験中である場合、それなりの資金が必要であり、そのために、妻(女性)も就業している確率が高いのかもしれない。また、列①より、ダブルケアは女性の就業確率を上げているが、列③の女性の正規雇用への就業確率には影響を与えていない。つまり、この女性の結果は、ダブルケア経験が正規以外への就業を促していることが示唆される。

表7 男女別分析：ダブルケアが就業に与える影響(2017年調査)

	①	②	③	④
被説明変数	妻(女性)が就業 (全就業形態含む)	夫(男性)が就業 (全就業形態含む)	妻(女性)が正規雇用	夫(男性)が正規雇用
分析方法	プロビット・モデル	プロビット・モデル	プロビット・モデル	プロビット・モデル
説明変数				
ダブルケア経験 ありダミー	0.514*** (0.130)	- 0.077 (0.242)	0.470*** (0.131)	0.124 (0.152)
要支援度/要介護 度(親の中で最高 段階)	- 0.025 (0.020)	0.029 (0.044)	0.003 (0.024)	- 0.006 (0.024)
末子の年齢	0.025*** (0.007)	0.003 (0.015)	- 0.009 (0.008)	0.005 (0.009)
妻の年齢	0.005 (0.009)	- 0.011 (0.017)	- 0.003 (0.010)	0.001 (0.010)
夫の年齢	- 0.010 (0.008)	0.011 (0.015)	- 0.008 (0.009)	- 0.018** (0.009)
定数項	0.110 (0.253)	1.793*** (0.491)	- 0.366 (0.285)	1.704*** (0.303)
サンプルサイズ	1,998	1,998	1,998	1,998

注) *の数値は統計的有意水準を表しており、*は10%、**は5%、***は1%水準で有意であることを表す。
カッコ内は標準誤差を示す。

表8 男女別分析：ダブルケアが就業に与える影響（2018年調査）

	①	②	③	④
被説明変数	妻（女性）が就業 （全就業形態含む）	夫（男性）が就業 （全就業形態含む）	妻（女性）が正規雇用	夫（男性）が正規雇用
分析方法	プロビット・モデル	プロビット・モデル	プロビット・モデル	プロビット・モデル
説明変数				
現在、ダブルケア 経験中	0.168* (0.088)	0.034 (0.204)	0.140 (0.095)	- 0.030 (0.104)
要支援度 / 要介護 度（親の中で最高 段階）	0.017 (0.020)	- 0.050 (0.043)	0.035 (0.022)	- 0.005 (0.023)
末子の年齢	0.023** (0.011)	0.037 (0.025)	- 0.009 (0.011)	0.022* (0.013)
妻の年齢	- 0.019 (0.012)	- 0.033 (0.031)	- 0.046*** (0.013)	- 0.018 (0.015)
夫の年齢	- 0.010 (0.010)	- 0.008 (0.024)	0.011 (0.011)	- 0.025** (0.012)
定数項	1.219*** (0.359)	3.538*** (0.891)	0.793** (0.370)	2.673*** (0.441)
サンプルサイズ	938	938	938	938

注) *の数値は統計的有意水準を表しており、*は10%、**は5%、***は1%水準で有意であることを表す。
カッコ内は標準誤差を示す。

3 ダブルケアの負担や影響はどのように規定されるのか

本節ではダブルケア負担の規定要因について分析する。そこで、表1-1および表1-2の変数の記述統計に基づいて、ダブルケアの負担感の概況を説明する。まず、「金銭的余裕がない」から「介護を頑張るべき」の行を見るとダブルケアの負担に関する意識が分かる。2017年調査では、大半は子育てのみ経験者であるため、子育てのみ経験者から見た、「ダブルケアではこういうことが大変なのだろう」という予想、2018年調査は全員ダブルケア経験者であるため、「ダブルケアではこういうことが大変だ」という実感が分かる。また、変数の定義により、平均値が大きいほど、その項目が負担になっている。

表1-1から、子育てのみ経験者の目線で負担が大きいのは、金銭的余裕、時間が取れない、仕事と家庭の両立、といった項目である。この傾向は、ダブルケア経験者に聞いた2018年調査でも同様である。しかし、全体に、2017年調査の方が平均値は大きい。つまり、子育てのみ経験者が予想する「ダブルケアはこれぐらい大変だろう」という予想には、少し過大な面があるといえよう。ただし、この傾向はダブルケアの負担が軽いということの意味するものではなく、実際にもダブルケアは大変ではあるが、子育てのみ経験者はそれ以上に辛いものだと想像している、ということである。

次に、ダブルケア従事者の負担感に影響を与えると考えられる「支えてくれた人」の状況を説明する。そこで「支え＝配偶者」の行以下、ダブルケアの際、誰に支えられたか、という質問の結果

表9 ダブルケアが日常生活に与える影響 (2017年調査・2018年調査の比較)

被説明変数	①家計		②時間		③交友		④健康		⑤生活全般	
	順序プロビット・モデル		順序プロビット・モデル		順序プロビット・モデル		順序プロビット・モデル		順序プロビット・モデル	
分析方法										
調査年次	2017	2018	2017	2018	2017	2018	2017	2018	2017	2018
説明変数										
女性ダミー	0.457*** (0.077)	0.182* (0.093)	0.404*** (0.077)	0.418*** (0.093)	0.327*** (0.076)	0.124 (0.093)	0.311*** (0.077)	0.146 (0.094)	0.381*** (0.076)	0.305*** (0.093)
要支援度/要介護度(親の中で最高段階)	0.003 (0.019)	0.055*** (0.016)	-0.003 (0.019)	0.021 (0.016)	-0.008 (0.019)	0.027 (0.016)	-0.044** (0.020)	0.025 (0.016)	-0.002 (0.019)	0.029* (0.016)
末子の年齢	-0.004 (0.006)	-0.015* (0.008)	-0.013** (0.006)	-0.012 (0.008)	-0.008 (0.006)	-0.001 (0.008)	-0.012** (0.006)	-0.002 (0.008)	-0.009 (0.006)	-0.009 (0.008)
年齢	0.002 (0.006)	0.010 (0.008)	-0.000 (0.006)	0.009 (0.008)	-0.004 (0.006)	-0.006 (0.008)	0.001 (0.006)	-0.007 (0.008)	-0.003 (0.006)	-0.001 (0.008)
第一子ダミー	-0.052 (0.050)	0.034 (0.069)	-0.036 (0.049)	0.065 (0.069)	0.006 (0.049)	0.032 (0.069)	-0.012 (0.050)	0.037 (0.070)	-0.016 (0.050)	0.036 (0.069)
姉妹ありダミー	-0.045 (0.050)	0.101 (0.069)	0.001 (0.050)	0.008 (0.068)	0.025 (0.050)	-0.035 (0.069)	0.003 (0.050)	-0.129* (0.070)	-0.069 (0.050)	0.009 (0.069)
有配偶ダミー	0.177 (0.121)	-0.249* (0.151)	0.115 (0.120)	-0.101 (0.150)	0.066 (0.120)	-0.379** (0.151)	0.066 (0.121)	-0.105 (0.152)	0.172 (0.120)	-0.385*** (0.151)
パート・非正規等ダミー	0.118 (0.072)	0.047 (0.102)	0.193*** (0.071)	0.308*** (0.101)	0.168** (0.071)	0.006 (0.102)	0.102 (0.071)	0.071 (0.103)	0.207*** (0.071)	0.105 (0.101)
正規雇用ダミー	0.207** (0.087)	0.070 (0.112)	0.226*** (0.086)	0.429*** (0.111)	0.167* (0.086)	0.094 (0.112)	0.111 (0.086)	0.100 (0.113)	0.126 (0.086)	0.094 (0.111)
年収(万円)	-0.000*** (0.000)	-0.001*** (0.000)	-0.000 (0.000)	-0.000 (0.000)	-0.000 (0.000)	-0.000 (0.000)	-0.000 (0.000)	-0.000 (0.000)	-0.000 (0.000)	0.000 (0.000)
周囲にダブルケア経験者が居るダミー	-0.161* (0.091)	0.116 (0.079)	-0.070 (0.091)	0.094 (0.079)	0.045 (0.091)	0.111 (0.079)	0.097 (0.091)	0.215*** (0.080)	-0.015 (0.090)	0.135* (0.079)
支え=配偶者	0.180*** (0.053)	0.188** (0.093)	0.153*** (0.053)	0.087 (0.093)	0.138*** (0.053)	-0.058 (0.093)	0.063 (0.053)	-0.041 (0.095)	0.145*** (0.053)	0.123 (0.093)
支え=子ども	0.163** (0.067)	-0.019 (0.079)	0.123* (0.066)	-0.085 (0.078)	0.024	-0.043	0.113* (0.067)	-0.026 (0.080)	0.136** (0.066)	-0.001 (0.079)
支え=親	0.027 (0.108)	0.040 (0.095)	0.039 (0.108)	-0.071 (0.095)	0.064 (0.108)	-0.087 (0.095)	-0.011 (0.108)	-0.151 (0.097)	-0.040 (0.108)	-0.122 (0.095)
支え=兄弟	0.097 (0.068)		-0.056 (0.068)		-0.047 (0.068)		-0.120* (0.069)		-0.007 (0.068)	
支え=親戚	-0.073 (0.165)	-0.138 (0.131)	0.093 (0.164)	-0.009 (0.129)	-0.052 (0.163)	-0.049 (0.130)	0.016 (0.165)	-0.078 (0.133)	-0.047 (0.163)	-0.092 (0.131)
支え=友人	0.374** (0.184)	-0.030 (0.132)	0.024 (0.178)	0.118 (0.131)	0.139 (0.178)	0.109 (0.131)	-0.246 (0.180)	0.149 (0.133)	-0.012 (0.178)	0.179 (0.132)
支え=近隣・その他	0.104 (0.144)	0.167 (0.107)	0.107 (0.144)	0.153 (0.107)	0.169 (0.143)	0.079 (0.107)	-0.063 (0.145)	0.073 (0.108)	0.074 (0.144)	0.132 (0.108)
支え=介護関係	0.100 (0.086)	-0.249** (0.122)	0.191** (0.085)	0.121 (0.121)	0.103 (0.085)	0.080 (0.121)	0.143* (0.085)	0.179 (0.122)	0.134 (0.085)	0.225* (0.121)
支え=医療関係	-0.249 (0.200)	-0.170 (0.203)	-0.205 (0.201)	0.325 (0.199)	-0.334* (0.201)	0.256 (0.202)	-0.236 (0.202)	0.057 (0.204)	-0.383* (0.203)	0.324 (0.201)
支え=教育関係	0.342 (0.222)	0.355* (0.216)	0.317 (0.220)	0.408* (0.216)	0.269 (0.217)	0.512** (0.213)	0.107 (0.216)	0.470** (0.214)	0.283 (0.215)	0.544** (0.215)
/cut1	-0.298 (0.254)	-0.896*** (0.340)	-0.419* (0.254)	-0.198 (0.338)	-0.546** (0.254)	-1.225*** (0.342)	-0.277 (0.256)	-0.720** (0.343)	-0.371 (0.253)	-1.036*** (0.339)
/cut2	0.173 (0.254)	-0.056 (0.339)	0.016 (0.254)	0.816** (0.339)	-0.113 (0.254)	-0.468 (0.341)	0.186 (0.256)	0.039 (0.343)	0.116 (0.253)	0.031 (0.339)
/cut3	0.786*** (0.255)	0.572* (0.339)	0.612** (0.254)	1.457*** (0.340)	0.533** (0.254)	0.305 (0.341)	0.909*** (0.256)	0.826** (0.344)	0.740*** (0.254)	0.660* (0.339)
/cut4	1.195*** (0.255)	1.082*** (0.340)	1.130*** (0.255)	2.038*** (0.342)	1.000*** (0.254)	0.806** (0.342)	1.298*** (0.257)	1.343*** (0.346)	1.203*** (0.254)	1.191*** (0.340)
サンプルサイズ	1,962	1,000	1,962	1,000	1,962	1,000	1,962	1,000	1,962	1,000

注) *の数値は統計的有意水準を表しており、*は10%、**は5%、***は1%水準で有意であることを表す。
カッコ内は標準誤差を示す。

表 10 ダブルケアによるストレスの規定要因 (2017年調査・2018年調査の比較)

被説明変数	①仕事		②子育て		③介護	
	順序プロビット・モデル		順序プロビット・モデル		順序プロビット・モデル	
分析方法						
調査年次	2017	2018	2017	2018	2017	2018
説明変数						
女性ダミー	0.392*** (0.077)	0.400*** (0.094)	0.246*** (0.077)	0.012 (0.095)	0.374*** (0.076)	0.190** (0.094)
要支援度/要介護度 (親の中で最高段階)	- 0.006 (0.019)	0.043*** (0.016)	- 0.047** (0.020)	0.013 (0.017)	0.003 (0.019)	0.034** (0.016)
末子の年齢	- 0.011* (0.006)	- 0.012 (0.008)	- 0.014** (0.006)	- 0.000 (0.008)	- 0.009 (0.006)	0.012 (0.008)
年齢	- 0.000 (0.006)	0.005 (0.008)	- 0.001 (0.006)	- 0.024*** (0.008)	- 0.003 (0.006)	- 0.020*** (0.008)
第一子ダミー	- 0.007 (0.050)	0.061 (0.069)	0.028 (0.050)	0.034 (0.071)	0.024 (0.050)	0.066 (0.070)
姉妹ありダミー	0.002 (0.050)	- 0.033 (0.068)	0.075 (0.050)	0.027 (0.070)	0.022 (0.050)	0.038 (0.069)
有配偶ダミー	0.020 (0.121)	- 0.287* (0.151)	0.006 (0.121)	- 0.070 (0.153)	0.120 (0.122)	- 0.201 (0.150)
パート・非正規等 ダミー	0.194*** (0.071)	0.222** (0.102)	0.015 (0.071)	0.095 (0.104)	0.096 (0.071)	0.008 (0.102)
正規雇用ダミー	0.155* (0.086)	0.245** (0.112)	0.130 (0.086)	0.065 (0.114)	0.148* (0.086)	0.038 (0.112)
年収(万円)	- 0.000 (0.000)	- 0.000 (0.000)	- 0.000* (0.000)	- 0.000 (0.000)	- 0.000*** (0.000)	- 0.000 (0.000)
周囲にダブルケア経 験者が居るダミー	0.050 (0.091)	0.054 (0.079)	0.131 (0.091)	0.116 (0.081)	0.174* (0.090)	0.097 (0.080)
支え = 配偶者	0.158*** (0.053)	0.144 (0.093)	0.057 (0.053)	- 0.140 (0.095)	0.090* (0.053)	0.026 (0.094)
支え = 子ども	0.161** (0.066)	- 0.085 (0.078)	- 0.027 (0.067)	- 0.088 (0.081)	0.059 (0.066)	0.059 (0.079)
支え = 親	0.019 (0.108)	- 0.126 (0.095)	- 0.046 (0.109)	- 0.012 (0.097)	- 0.051 (0.107)	- 0.139 (0.096)
支え = 兄弟	- 0.013 (0.068)		- 0.164** (0.069)		- 0.056 (0.068)	
支え = 親戚	- 0.008 (0.163)	- 0.073 (0.130)	- 0.069 (0.166)	- 0.183 (0.133)	- 0.068 (0.166)	- 0.297** (0.132)
支え = 友人	0.237 (0.183)	0.163 (0.132)	- 0.149 (0.180)	0.352*** (0.133)	- 0.231 (0.180)	0.265** (0.132)
支え = 近隣・その他	0.096 (0.145)	0.224** (0.107)	0.002 (0.144)	0.018 (0.108)	0.019 (0.142)	0.079 (0.107)
支え = 介護関係	0.229*** (0.086)	0.097 (0.121)	0.007 (0.086)	- 0.024 (0.125)	0.019 (0.085)	0.318*** (0.122)
支え = 医療関係	- 0.164 (0.203)	0.200 (0.200)	- 0.264 (0.206)	0.114 (0.204)	- 0.098 (0.201)	- 0.004 (0.202)
支え = 教育関係	0.412* (0.222)	0.416* (0.217)	0.083 (0.216)	0.235 (0.215)	- 0.069 (0.219)	- 0.013 (0.214)
/cut1	- 0.514** (0.255)	- 0.812** (0.340)	- 0.549** (0.255)	- 1.501*** (0.346)	- 0.426* (0.254)	- 1.394*** (0.341)
/cut2	- 0.064 (0.255)	0.292 (0.339)	- 0.014 (0.255)	- 0.672* (0.344)	0.061 (0.254)	- 0.476 (0.339)
/cut3	0.541** (0.255)	0.886*** (0.340)	0.711*** (0.255)	0.117 (0.344)	0.815*** (0.255)	0.268 (0.339)
/cut4	1.039*** (0.255)	1.456*** (0.341)	1.067*** (0.255)	0.798** (0.348)	1.222*** (0.255)	0.864** (0.342)
サンプルサイズ	1,962	1,000	1,962	1,000	1,962	1,000

注) *の数値は統計的有意水準を表しており、*は10%、**は5%、***は1%水準で有意であることを表す。
カッコ内は標準誤差を示す。

表 11 ダブルケアへの規範の規定要因 (2017 年調査・2018 年調査の比較)

被説明変数	①子育て		②介護	
	順序プロビット・モデル		順序プロビット・モデル	
分析方法				
調査年次	2017	2018	2017	2018
説明変数				
女性ダミー	0.249*** (0.076)	0.039 (0.093)	0.134* (0.076)	- 0.125 (0.094)
要支援度 / 要介護度 (親の中で最高段階)	- 0.000 (0.019)	0.012 (0.016)	- 0.020 (0.019)	0.007 (0.016)
末子の年齢	- 0.023*** (0.006)	- 0.026*** (0.008)	- 0.010 (0.006)	- 0.018** (0.008)
年齢	- 0.004 (0.006)	- 0.001 (0.008)	- 0.003 (0.006)	0.004 (0.008)
第一子ダミー	0.025 (0.049)	0.030 (0.069)	- 0.016 (0.050)	- 0.011 (0.070)
姉妹ありダミー	0.037 (0.049)	0.041 (0.068)	0.017 (0.050)	0.004 (0.069)
有配偶ダミー	0.004 (0.120)	- 0.120 (0.150)	0.105 (0.123)	- 0.071 (0.151)
パート・非正規等ダミー	0.089 (0.071)	0.130 (0.102)	0.074 (0.072)	0.156 (0.104)
正規雇用ダミー	0.167* (0.085)	0.130 (0.111)	0.195** (0.086)	0.215* (0.113)
年収 (万円)	- 0.000* (0.000)	- 0.000 (0.000)	- 0.000 (0.000)	- 0.000 (0.000)
周囲にダブルケア経験者が居るダミー	0.027 (0.090)	0.068 (0.079)	0.025 (0.091)	0.122 (0.080)
支え = 配偶者	0.091* (0.053)	0.025 (0.093)	0.104* (0.053)	0.071 (0.094)
支え = 子ども	0.059 (0.066)	0.096 (0.078)	0.074 (0.067)	0.128 (0.079)
支え = 親	- 0.029 (0.107)	- 0.033 (0.095)	0.013 (0.108)	0.022 (0.096)
支え = 兄弟	- 0.069 (0.068)		- 0.144** (0.068)	
支え = 親戚	0.089 (0.163)	0.030 (0.130)	0.067 (0.163)	0.048 (0.132)
支え = 友人	0.071 (0.178)	0.153 (0.132)	- 0.086 (0.180)	0.029 (0.135)
支え = 近隣・その他	0.218 (0.142)	- 0.020 (0.107)	0.006 (0.144)	0.062 (0.109)
支え = 介護関係	- 0.052 (0.085)	0.027 (0.122)	- 0.017 (0.086)	- 0.045 (0.123)
支え = 医療関係	0.010 (0.200)	0.333* (0.200)	- 0.100 (0.204)	0.337* (0.203)
支え = 教育関係	0.370* (0.213)	0.276 (0.214)	0.156 (0.214)	0.180 (0.216)
/cut1	- 0.827*** (0.252)	- 1.125*** (0.339)	- 0.452* (0.255)	- 0.485 (0.342)
/cut2	- 0.251 (0.252)	- 0.216 (0.337)	0.090 (0.255)	0.452 (0.341)
/cut3	0.461* (0.252)	0.557* (0.338)	0.862*** (0.255)	1.280*** (0.343)
/cut4	0.887*** (0.252)	1.216*** (0.340)	1.227*** (0.256)	1.843*** (0.347)
サンプルサイズ	1,962	1,000	1,962	1,000

注) * の数は統計的有意水準を表しており, * は 10%, ** は 5%, *** は 1%水準で有意であることを表す。
カッコ内は標準誤差を示す。

について確認する。多いのは配偶者、子ども、兄弟といった血縁者ないし家族ということになる。また、全体に、2018年調査の方が平均値は大きい。つまり、実際にダブルケア状態になると、子育てのみ経験者が想像するよりも多くの助けが得られることが分かる。先ほど述べた、子育てのみ経験者と経験者では、子育てのみ経験者の方が負担を過大に予想している、という点は、この傾向と関連する可能性がある。つまり、実際にダブルケア状態になると、子育てのみ経験者が思っているよりも多くの助けがあり、それゆえに、負担は子育てのみ経験者の予想ほどにはならない、と解釈できる。

これらを踏まえて、ダブルケアについての負担や影響の規定要因について分析を行ったものが、表9～11である。表9～11では、2017年調査を用いた分析と、2018年調査を用いた分析について、比較を行っている。その際、2017年調査の調査協力者から、ダブルケア経験者のデータを除いて分析している。こうすることで、2017年調査＝ダブルケア経験なし（子育てのみ経験者）、2018年調査＝ダブルケア経験あり、になり、ダブルケア経験の有無で、負担の規定要因がどう変わるかが分かる。なお、2017年調査については、ダブルケアを実際に経験していない者のデータだけを用いている。そのため、正確には、2017年調査を用いた分析は、「ダブルケアの負担について、どのように予想しているか」の規定要因に関する分析である。

（1）ダブルケアによる日常生活への影響——家計・時間・交友・健康

まず、ダブルケアが家計、時間、交友、健康、そして生活全般といった、日常生活に与える影響の規定要因について確認する。具体的な定義は、以下のとおりである。

- ・家計：「いまの暮らしを考えれば、ダブルケアにかかる金銭的な余裕がないと思うことがありますか（ありましたか）。」
- ・時間：「ダブルケアのために自分の時間が十分に取れないと思いますか（思いましたか）。」
- ・交友：「ダブルケアがあるので家族や友人と付き合いづらくなっていると思いますか（思いましたか）。」
- ・健康：「ダブルケアのために体調を崩したと思っただけですか（ありましたか）。」
- ・生活全般：「ダブルケアが始まって以来、自分の思い通りの生活ができなくなったと思うことがありますか（ありましたか）。」

質問に対する選択肢は共通で、「1 思わない（思わなかった）」「2 たまに思う（たまに思った）」「3 時々思う（時々思った）」「4 よく思う（よく思った）」「5 いつも思う（いつも思った）」の五つである。つまり、数値が大きいほど負担が大きいことになる。被説明変数の定義から、数値がプラスのものは、ダブルケアの負担を増す要因であり、数値がマイナスのものは、ダブルケアの負担を緩和する要因である。また、以下では、統計的に有意であった結果についてのみ注目する。

①家計

最初に、ダブルケアが家計に与える影響はどのように規定されるのだろうか。まず、女性ダミーは2017年調査、2018年調査ともにプラスである。ダブルケアの際、女性の方が金銭的余裕について厳しい予想を立てており、実際にダブルケアになった際にも、金銭的余裕の無さを感じているこ

とが分かる。ダブルケアに限ったことではないのかもしれないが、女性の方が家計事情について厳しく受け止める傾向にあると考えられる。次に、2018年調査の場合のみ、親の要介護度⁽¹⁰⁾がプラスになっている。要介護度が高いと、利用するサービスの介護報酬も上がり、金銭的な負担が増すために、家計に余裕がなくなると分かる。また、末子の年齢については、2018年調査のみマイナスである。末子の年齢が上がると、一定年齢までは教育費等の負担は減る。また、子どもが高校生、大学生ともなれば、アルバイトで多少家計を助けてもらう選択肢も出てくる。そのために、末子の年齢が高いと、家計の余裕が出てくるのだろう。次に、有配偶ダミーは、2018年調査のみマイナスである。配偶者が居ると、収入源になり得る家族が一人増えるため、ダブルケアになっても、金銭的な余裕のなさを感じなくて済むのではないかと考えられる。次に、正規雇用ダミーは、2017年調査のみプラスである。正規雇用の方が現在、将来の収入の見通しが良いはずで、この結果は一見すると矛盾するものである。しかし、正規雇用の場合、「ダブルケアになったら、収入が減るかも」と考える傾向が強いと解釈することもできる。年収については、2017年調査、2018年調査ともにマイナスである。年収が高いと、家計に金銭的余裕が出る、というのは当然のことである。

次に、「周囲にダブルケア経験者が居るダミー」は、2017年調査のみプラスである。本人が子育てのみ経験者で、かつ周囲にダブルケア経験者が居る場合、ダブルケアの金銭的な負担について具体的な想像が可能になり、家計の金銭的余裕について厳しめに予想するのだと考えられる。ところが、実際にダブルケアが始まると、周囲にダブルケア経験者が居るかどうかは関係なくなる。なぜなら、周囲にダブルケア経験者が居るかどうかは、実際の金銭的負担には何も影響しないはずだからである。

次に、「支え＝」と付いている変数は、ダブルケアで誰が支えてくれたか（支えてくれているか、支えてくれると思うか）に関する変数である。例えば、「支え＝配偶者」の横にある数値は、「配偶者が支えになっている／支えになった／支えになると予想している」場合の、負担感への影響である。「支え＝配偶者」については、2017年調査、2018年調査ともプラスである。また、「支え＝子ども」については、2017年調査のみプラスである。これらの結果は、逆の因果関係を反映していると考えられる。ダブルケアで金銭的余裕がなくなった際、子育てのみ経験者は「配偶者や子ども」に頼りたいと見込んで考える傾向にあり、一方で、実際にダブルケアを経験している者は、配偶者だけを頼りにしていると考えられる。次に、「支え＝友人」については、2017年調査のみプラスである。この結果も、逆の因果関係を反映していると考えられる。つまり、ダブルケア状態になると、家計に金銭的余裕がなくなると予想している、子育てのみ経験者は、「友人に支えて欲しい」と考える傾向にあるのだろう。次に、「支え＝介護関係」が2018年調査のみマイナスになっている。介護サービスは有料であるため、介護関係者を頼りにすることで、金銭的余裕はなくなるはずである。一つの解釈としては、実際の金銭的な負担は発生するとしても、精神的な負担が減ることにより、金銭的余裕についても前向きに考えられるのかもしれない。最後に、「支え＝教育関係」は2018年調査の場合のみプラスである。この結果は、ダブルケアの際、教育サービスを頼ろうとすることで、

(10) 正確には、要支援度／要介護度であるが、表記の煩雑さを避けるために、以下、本文では、要支援度／要介護度のことを、単に要介護度と表記する。

金銭的な負担が増え、金銭的余裕がなくなる、と解釈するべきであろう。

②時 間

次に、ダブルケアが時間のゆとりに与える影響はどのように規定されるのだろうか。まず、女性ダミーがプラスである。これは、ダブルケアの時間的な負担が女性に集中しやすいからだと思われる。次に、末子の年齢は2017年調査のみマイナスである。2017年調査は負担に関する予想、2018年調査は経験者の目から見た実際の負担であると考えられるため、子育てのみ経験者は末子の年齢が上がると時間の余裕ができると予測するが、実際にはそうではない、と考えられる。就業中であつたり、正規雇用であつたりすると、ダブルケアの時間的な負担が悪化する。これは、仕事とダブルケアの両立が辛いことを表しているといえる。

2017年調査に関する結果から、「ダブルケア状態になったら、配偶者や子どもが支えてくれる」と予想している者は、ダブルケア状態になった際の時間の余裕に関して、厳しい予想をしている。この結果については、解釈が難しいが、本稿の分析とは逆の因果関係が反映されている可能性がある。つまり、子育てのみ経験者で、「ダブルケアになると時間の余裕がなくなる」と考えている者ほど、配偶者や子どもに頼りたいと考える傾向が強いのではないか。そう考えると、2017年調査を用いた分析で、「支え＝介護関係」がプラスになっていることも理解できる。「ダブルケアになると時間の余裕がなくなる」と考えている者ほど、ダブルケア状態になった時には介護関係者を頼りにしたい、と考える傾向が強いのであろう。2018年調査の、「支え＝教育関係」の場合も同様で、ダブルケア中に時間に余裕がないと感じたものは、教育関係者に支えを求めたのかもしれない。

③交 友

さらに、ダブルケアが家族や友人との交友関係に与える影響はどのように規定されるのだろうか。まず、2017年調査を用いた場合のみ、女性ダミーがプラスである。つまり、子育てのみ経験者について見ると、女性の方が、「ダブルケアをしていると、交友に支障が出る」と考えていることになる。しかし、ダブルケア経験者についてはそのような違いがない。この結果から、子育てのみ経験者の女性が、交友への支障について重く考えすぎている（実際には交友への支障は大きくない）のか、あるいは、子育てのみ経験者の男性が交友への支障について軽く考えすぎている（交友への支障は大きい）のか、少なくとも、どちらか一方は成立していることが示唆される。有配偶ダミーについては、2018年調査のみマイナスである。つまり、子育てのみ経験者の予想とは異なり、実際に経験してみると、配偶者の存在があることで、交友に支障が出なくて済んでいる、ということである。配偶者の存在が、一定程度の支えになっていることがうかがえる。雇用関係の変数については、2017年調査の場合のみプラスである。つまり、子育てのみ経験者は、介護に加えて、仕事をしていると、あるいは正規雇用で拘束時間が長いと、交友に支障が出ると思われる。しかし、2018年調査の結果が示すように、実際には、仕事をしていることにより、ダブルケアが交友に与える悪影響が大きくなるわけではないと分かる。

「支え＝配偶者」については2017年調査のみプラスである。子育てのみ経験者、かつ、「ダブルケアをしていると、交友に支障が出る」と考えている者は、配偶者を頼りにしたいと考えるので

あろう。そして、2018年調査を用いた分析では、有配偶ダミーがマイナスであることが示すように、配偶者の存在は、実際に、ダブルケアが交友に与える悪影響を緩和している。2017年調査のみ、「支え＝医療関係」がマイナスである。つまり、子育てのみ経験者で、ダブルケア状態になった際、医療関係者が支えになってくれると考えている者は、ダブルケア状態になっても交友に支障は出ないと考えている。ただし、実際にダブルケアを経験した者が対象の2018年調査の結果では、そのような傾向はない。つまり、医療関係者が助けになってくれても、ダブルケアをすることによる、交友への支障はなくなるようである。「支え＝教育関係」については、2018年調査のみプラスである。つまりダブルケアによって交友への支障が出た者ほど、教育関係者を頼ったのだと考えられる。

④健康

続いてダブルケアが健康面に与える影響はどのように規定されるのかを確認する。まず、女性ダミーについては、2017年調査の場合のみプラスである。そのため、子育てのみ経験者の女性は、ダブルケアが健康に与える影響を深刻に考えている（実際には影響は予想ほど大きくない）のか、あるいは、子育てのみ経験者の男性はダブルケアが健康に与える影響を軽く考えている（実際の影響は予想より大きい）のか、少なくとも、どちらか一方は成立していることになる。前者の方が望ましい状況であるが、どちらの状況が実情に近いのか、本稿の分析だけでは判断がつかない。親の要介護度、末子の年齢については、2017年調査のみ、マイナスになっている。親の要介護度が高いと、ダブルケアが健康に与える影響について軽めに予想する、という結果は解釈が困難である。一方で、末子の年齢が高いと、ダブルケアが健康に与える影響について軽めに予想する、という結果は解釈が容易である。末子の年齢が高いと、ダブルケアの困難さについて、さほど厳しい予想をせず、したがって、健康への影響も低めに見積もるのだろう。姉妹ありダミーが、2018年調査の場合だけマイナスになっている。姉妹がある場合には、ダブルケアになった際、何らか助けてくれるために、健康面への影響が緩和されるのだと考えられる。

周囲にダブルケア経験者が居るダミーについては、2018年調査の場合のみ、プラスである。また、統計的有意水準も1%であるため、無視できない影響がある。周囲にダブルケア経験者が居る方が、ダブルケアによる健康面への影響が軽くなる、という方が、直感に合った結果である。しかし、本稿の結果は逆である。一つの解釈としては、ダブルケアを経験している者が周りに居ると、実際にダブルケアが始まった際、頑張りすぎてしまい、そのため健康に悪影響が出る、と考えられる。「支え＝子ども」は2017年調査の場合のみプラスである。この結果は、逆の因果関係を反映したものであり、ダブルケアによって健康に悪影響が出ると予想している子育てのみ経験者は、子どもに支えて欲しい、と考えていると解釈できる。「支え＝兄弟」は、2017年調査の場合のみマイナスである。ダブルケアになった際、兄弟に助けてもらえると予想する子育てのみ経験者は、ダブルケアによる健康への影響は小さい、と予測しているのであろう。「姉妹ありダミー」が2018年調査の場合にマイナスになっていることから、兄弟の存在は、予想だけでなく、実際にも、ダブルケアが健康に与える影響を緩和しているといえよう。「支え＝介護関係」が2017年調査のみプラスになっているのも、逆の因果関係を反映した結果であると考えられる。つまり、ダブルケアが健康に与える

影響を深刻に予想している者は、その影響を緩和すべく、介護関係者の支えを求めると解釈できる。最後に、「支え＝教育関係」は、2018年調査のみプラスである。これも逆の因果関係を反映したものだと考えられる。つまり、ダブルケアによって健康を害している者ほど、教育関係者の支えを求めている、あるいは求めていたのであろう。負担についての予想を表す2017年調査では「支え＝介護関係」のみ、実際の負担を表す2018年調査では「支え＝教育関係」のみ有意になっていることが興味深い。ダブルケアによって健康を害しそう、あるいは害したとき、子育てのみ経験者は「介護関係者が頼りになるだろう」と予想しているが、実際に頼りにしたのは教育関係者、ということになる。

⑤生活全般

最後に、生活全般への影響はどのように規定されるのだろうか。女性ダミーについては、2017年調査、2018年調査ともにプラスである。つまり、ダブルケアによって「生活が不自由になる」と予想しているのも、実際に生活が不自由になっているのも女性である。ダブルケアの負担は女性に集中しやすいことが示唆される。次に、親の要介護度については、2018年調査の場合のみプラスである。このことから、親の要介護度が高いと、生活に支障が出やすいと分かる。また、有配偶ダミーは、2018年調査の場合のみ、マイナスである。配偶者が居ると、ダブルケアによる生活への支障は抑えられている。ダブルケアの負担が女性に偏りやすいことは否めないが、一方で、配偶者が居れば、生活への支障が抑えられていることもまた確かである。次に、パート・非正規等ダミーが、2017年調査の場合のみプラスである。なぜ正規雇用ダミーはプラスになっていないのかというと、恐らく、正規雇用であることには、時間が取れなくなるというマイナスの面と、収入面の見通しに余裕が出るというプラスの面があるからではないか。正規雇用の場合、時間が取れなくなるという意味では、ダブルケアの支障が出やすいが、今後の見通しも含めての資金面では支障が出にくく、そのために、プラスになっていないのだろう。

周囲にダブルケア経験者が居るダミーについては、2018年調査の場合のみ、プラスで有意である。周囲にダブルケア経験者が居る場合、ダブルケアに尽力しすぎるために、生活に支障が出やすいのかもしれない。「支え＝配偶者」「支え＝子ども」については、2017年調査の場合のみプラスである。これらの結果は、逆の因果関係を反映したものであろう。つまり、ダブルケアによって、生活に支障が出ると予想している傾向が強いほど、配偶者や子どもの支えを期待する傾向が強いのであろう。そうすると、2018年調査の結果が意味するところは、ダブルケアによって生活が不自由になるのがそうでなかろうが、配偶者や子どもに支えてもらおうとする、ということだと考えられる。2018年調査の場合のみ、「支え＝介護関係」と「支え＝教育関係」がプラスである。つまり、ダブルケアによって生活に支障が出てくると、介護関係者や教育関係者の支えを求めている。2017年調査のみ、「支え＝医療関係」がマイナスである。医療関係者の支えが期待できると予想している子育てのみ経験者は、「ダブルケアになっても、生活に支障は出ないだろう」と予想する傾向が強いといえる。

(2) ダブルケアによるストレス——仕事・子育て・介護

今回はダブルケアによるストレスの規定要因を確認する。具体的な定義は、以下のとおりである。

・仕事：「ダブルケアのほかに家事や仕事などもこなしていかなければならず「ストレスだな」と思うことがありますか（ありましたか）。」

・子育て：「子どものそばにいと腹が立つことがありますか（ありましたか）。」

・介護：「介護を受けている方のそばにいと腹が立つことがありますか（ありましたか）。」

分析結果は表10にまとめられており、表の見方は表9と同様である。

①仕事

まず、ダブルケアによる仕事と家庭の両立についてのストレスはどのように規定されるのだろうか。女性ダミーがプラスであるため、女性の方が、ダブルケアになった際の仕事と家庭の両立が難しいのだと考えられる。また、2018年調査の場合のみ、「要介護度（親の中で最高段階）」、つまり自分の父母、配偶者の父母のうち、最も要介護度が高い者の、要介護度がプラスになっている。ダブルケア状態の際、要介護者の要介護度が大きいほど、仕事と家庭の両立が難しくなるのであろう。有配偶ダミーについては、2018年調査の場合のみマイナスである。つまり、子育てのみ経験者の予想とは異なり、実際にダブルケアを経験すると、配偶者が居てくれることにより、仕事と家庭の両立がしやすくなっていると分かる。就業関係の変数についてはここでもプラスである。仕事と家庭の両立という問題自体、無業者には関係がないことから、当然の結果であろう。

「支え＝配偶者」「支え＝子ども」については、2017年調査の場合のみプラスである。これは逆の因果関係を反映した結果であると考えられ、子育てのみ経験者で、「ダブルケアになると仕事と家庭の両立が難しくなる」と考えている者ほど、配偶者や子どもに頼りたいと考える傾向が強いのだろう。「支え＝介護関係」については、2017年調査のみプラスになっている。また「支え＝教育関係」は、どちらの場合もプラスである。仕事と家庭の両立が難しかった／難しい者（2018年調査）、あるいは難しいと考えている者（2017年調査）ほど、介護関係者や教育関係者を頼った（2018年調査）、あるいは頼ろうと考えている（2017年調査）のではないかと推察される。

②子育て

次に、ダブルケア中の子育てのストレスはどのように規定されるのだろうか。女性ダミーは2017年調査のみプラスであるため、子育てのみ経験者について見ると、女性の方が、ダブルケア中は子育てがストレスになると予想していることになる。しかし、ダブルケア経験者についてはそのような違いがない。そのため、子育てのみ経験者の女性は、ダブルケア時の子育てのストレスについて重く考えすぎている（実際にはストレスは予想ほど大きくない）のか、あるいは、子育てのみ経験の男性が子育てのストレスについて軽く考えすぎている（実際のストレスは予想より大きい）のか、少なくとも、どちらか一方は成立していることが示唆される。子どもの立場からすると、前者の方が好ましい状況であろう。

次に、要介護度についても、2017年調査の場合のみ、マイナスである。ということは、子育てのみ経験者は、「要介護度が高い親（義理の親含む）を持つと、子育てに対するストレスは減る」と予

想しており、ダブルケア経験者は、親の要介護度が高かろうが、子育てに対するストレスに影響はない、と考えている。つまり、子育てのみ経験者は、要介護度が高い親を持っている場合には、介護と比して、子育てが相対的に楽に感じるために、「ダブルケア状態になっても、子どもに対して腹が立つことはないだろう」と予想しているのだろう。ただし、2018年調査の結果から、実際には、親の要介護度は、ダブルケア中の子育てのストレスに影響していない。次に、末子の年齢についても、2017年調査の場合のみマイナスである。ということは、子育てのみ経験者は、「ダブルケア状態になっても、子どもの年齢が上がれば、子育ての負担が減り、子育てにストレスを感じなくなる」と予想している。ところが、2018年調査の結果から、実際にはそのような傾向は見られない。親の要介護度、末子の年齢が、「ダブルケアをする際の子育てのストレスについての予想」には影響するが、「実際にダブルケアをする際の子育てのストレス」には影響していない。これらの結果は、親の要介護度や末子の年齢に関係なく、（子育てのみ経験者の予想と異なり）ダブルケア中は、子育てに対する一定のストレスが発生してしまうことを示唆する。2018年調査のみ年齢がマイナスだが、これは、年齢を重ねることにより、子育てに対する対処能力が上がっているのかもしれない。また、年収については、2017年調査、予想の場合のみマイナスである。年収が高いほど、「ダブルケア状態になっても、子育てにストレスは感じないだろう」と予想していることになる。おそらくは、年収が高いほど、子育てに関するサービス利用の選択肢が多いからではないか。ところが、2018年調査の結果を見ると、実際には、年収と子育てのストレスに関係がない。年収が高く、サービス利用の選択肢が多いとしても、ダブルケア状態になれば、子育てにストレスを感じてしまうのかもしれない。

続いて、2017年調査のみ、「支え＝兄弟」はマイナスである。つまり、「ダブルケア状態になった際、兄弟が支えになってくれるだろう」と予想している場合、「ダブルケア状態になっても、子育てに対してあまりストレスを感じないだろう」と予想する傾向がある。この結果について、兄弟は子育てについて相談しやすい相手だという解釈も可能だが、なぜ、配偶者、子ども、親にはそのような効果がなく、兄弟にだけその効果があるのかは、判断が難しい。また、2018年調査には、この選択肢自体がないため、結果の比較はできない。次に、2018年調査のみ、「支え＝友人」がプラスである。つまり、ダブルケア状態になったとき、友人に支えてもらった（もらっている）者は、子育てに対して強いストレスを感じている。この結果は、逆の因果関係を示唆するものであろう。つまり、ダブルケア状態になった際、子育てにストレスを感じていると、友人に支えを求める傾向があるのだと考えられる。

③介護

さらに、ダブルケア中の介護のストレスは、どのように規定されるのだろうか。女性ダミーについては、2017年調査、2018年調査ともプラスである。つまり、女性の方が、「ダブルケア中は介護にストレスを感じるだろう」と予測しており、実際にもそうであることが分かる。この結果から、ダブルケアにおける介護の負担、ストレスが女性に集中している恐れがあると示唆される。次に、2018年調査の場合のみ、要介護度がプラスである。つまり、ダブルケア中の介護のストレスは、要介護者の要介護度で決まっていることになる。しかし、2017年調査では、要介護度がプラスでは

なく、なぜ、子育てのみ経験者は、「要介護者の要介護度が高いほど、介護のストレスが大きい」と予想しないのかは、解釈が難しい。また、年齢については、2018年調査の場合のみ、マイナスである。(4)子どもに腹が立つと同様、人生経験により、ダブルケア中の介護のストレスにうまく対処できると考えられる。年取についても、(4)子どもに腹が立つ、の時と同様で、2017年調査のみ、マイナスである。つまり、年取が高いほど、介護サービス利用の選択肢が多いことから、「ダブルケア状態になっても、介護のストレスは少ないだろう」と予測(2017年調査)しているが、実際には(2018年調査)そうになっていない。介護サービスを利用できたとしても、ダブルケア状態になると、介護にストレスを感じてしまうことを示唆している。

加えて、「周囲にダブルケア経験者が居るダミー」が、2017年調査の時のみ、プラスになっている。周囲にダブルケア経験者が居ると、介護の大変さを耳にすることが多く、そのため、ダブルケア時の介護のストレスについて厳しい予想をするのではないか。しかし、実際にダブルケアが始まれば、周囲にダブルケア経験者が居るかどうかはあまり関係ないため、2018年調査を用いて分析すると、「周囲にダブルケア経験者が居るダミー」はプラスにならない。また、「支え＝親戚」が、2018年調査の場合のみ、マイナスになっている。親戚が支えになると、ダブルケア時の介護のストレスが軽減されるようである。なぜ、親、兄弟などでなく親戚にだけこのような効果があるのかは、解釈が難しい。親や兄弟よりも、親戚の方が心理的あるいは関係的な距離感があるため、それだけストレスの原因となるようなコンフリクトが起りにくいのかもかもしれない。次に、「支え＝友人」については、2018年調査の場合のみプラスである。これは、逆の因果関係、つまり、介護のストレスが大きいほど友人に支えを求めているのだと解釈できる。「支え＝介護関係」についても同様に、2018年調査の場合のみプラスである。解釈についても同様に、介護のストレスが大きいために、介護関係者の支えを必要としているのであろう。

4 ダブルケアへの規範——子育て・介護

今度はダブルケアへの規範の規定要因を確認する。つまり、ダブルケアについて、より厳しい規範を内在化させているのはどのような者であるのかを確認する。具体的な定義は、以下のとおりである。

- ・子育て：「自分は今以上にもっと頑張って子育てすべきだと思うことがありますか(ありましたか)。」
 - ・介護：「自分は今以上にもっと頑張って介護すべきだと思うことはありますか(ありましたか)。」
- 分析結果は表11にまとめられており、表の見方は表9、表10と同様である。

(1) 子育て

まず、ダブルケア中の子育てに対する規範の規定要因は何であろうか。女性ダミーについては、2017年調査のみプラスである。つまり、子育てのみ経験者の女性は、同男性と比べ、「ダブルケアになった際、子育てを頑張らないといけないうらな」と考える傾向にある。ところが、2018年調査では女性ダミーがプラスではない。つまり、いざ実際のダブルケアが始まると、ダブルケアを行うのが男性であれ、女性であれ、子育てに対する規範に変わりはないことになる。次に、末子の年

年齢は、いずれの調査でもマイナスになっている。これは予想される結果であり、末子の年齢が高いと、子どもに手がかからなくなるため、「子育てを頑張らないと」と思うことも減るし、また、それは子育てのみ経験者にも予測可能な結果なのだろう。正規雇用ダミーについては、2017年調査の場合のみプラスである。これは、正規者雇用の場合、育児、介護、仕事の並立が大変だと考え、子育てに対する規範が強まるのではないか。しかし、2018年調査の場合は、正規雇用ダミーがプラスではない。つまり、実際にダブルケアが始まると、正規雇用かどうかにかかわらず、育児、介護、仕事の並立は大変であり、子育てへの規範に、就業状態による差は出ないのではないか。年収については、2017年調査の場合のみマイナスである。年収が高いと、子育てサービス利用の選択肢は多いため、子育てへの規範について、弱めに予想するのであろう。ところが、実際の負担を表す2018年調査では、年収の係数はマイナスになっておらず、実際には年収の多寡にかかわらず、ダブルケアは大変であり、年収が多いことは、子育てへの規範の緩和剤にはならないと考えられる。

「支え＝配偶者」については、2017年調査の場合のみ、プラスになっている。つまり、「ダブルケアになったら、子育てへの規範が強まる」と予想している子育てのみ経験者は、配偶者の支えを期待しているのであろう。「支え＝医療関係」については、2018年調査のみプラスになっている。実際にダブルケアを経験し、子育てへの強い規範を経験すると、精神的なストレスから、医療機関に通うことが増えるのかもしれない。最後に、「支え＝教育関係」は、2017年調査のみプラスになっている。この結果は、逆の因果関係を反映しており、子育てのみ経験者で、「ダブルケアになったら、子育てへの規範が強まる」と予想している者は、教育関係者に頼りたいと考える傾向にあると解釈できる。

（2）介護

次に、ダブルケア中の介護に対する規範の規定要因は何か。女性ダミーについては、2017年調査のみプラスである。子育てのみ経験者の女性は、同男性と比べて、ダブルケアになった際、「ダブルケアになった際、介護を頑張らないといけなだろうな」と考えている。ところが、実際のダブルケア負担を表す2018年調査では、女性ダミーがプラスではない。つまり、いざ実際のダブルケアが始まると、ダブルケアを行う者の性別いかんにかかわらず、介護への規範に変わりはないことになる。次に、末子の年齢は、2018年調査のみ、マイナスになっている。つまり、末子の年齢が高くなると、「介護をもっと頑張らないと」という気持ちが薄れる。この結果は以下のように解釈できる。末子の年齢が上がることで、ダブルケアの際、介護に割ける心理的・時間的ゆとりが増えるために、介護を十分に行うことができ、介護への規範は弱まるのであろう。一方で、2017年調査の結果から、子育てのみ経験者は、末子の年齢が上がることで、ダブルケア時の介護への規範について関係がないと考えている。正規雇用ダミーについては、2017年調査、2018年調査、ともにプラスである。つまり、育児、介護、仕事の並立は、子育てのみ経験者から見ても困難であり、そして実際に困難であると考えられる。その難しさが、「もっと介護を頑張らないと」という規範につながっている。

「支え＝配偶者」については、2017年調査の場合のみ、プラスである。ダブルケアになった際、介護への規範が強いと予想している子育てのみ経験者は、配偶者の支えを期待しているのだと分か

る。また、「支え＝兄弟」が2017年調査の場合のみマイナスである。子育てのみ経験者は、ダブルケアになった際、兄弟の助けが期待できれば、介護を全て一人で頑張る必要がないと考える傾向にある。そのため、介護への規範は強くないと予想しているのではないか。最後に、「支え＝医療関係」は2018年調査のみプラスである。この結果は逆の因果関係を反映しており、ダブルケアを行って、介護への規範が強くなると、医療機関に頼ろうとする傾向があると解釈できる。

おわりに

本稿では「ダブルケアに関する調査2017, 2018」を用いて、ダブルケアが人々の行動に与える影響について分析してきた。「ダブルケア」はごく最近、日本において注目を集めるようになった概念であり、実態の把握は始まったばかりである。その中で、「ダブルケアに関する調査2017, 2018」はダブルケア経験者の実態に迫る貴重な情報を提供している。本節では、本分析において分かったことと本研究に残された課題について述べる。

本稿で行った計量分析は、主に、(1) ダブルケア経験があるかどうかの規定要因(2017年調査のみ使用)、(2) ダブルケアが就業に与える影響(2017年調査, 2018年調査で別々に分析)、(3) ダブルケアの負担・日常生活への影響・ダブルケア規範の規定要因(2017年調査, 2018年調査で別々に分析し、結果を比較)の三つである。

まず、(1)については、ダブルケア経験による就業への影響は見られない。ただし、正規雇用者、パート・非正規等就業者は、ダブルケアを経験している確率が高い。この結果は逆の因果関係が反映されたものだと考えられる。つまり、実際の因果関係は、正規雇用者、パート・非正規等就業者は、ダブルケアを経験している確率が高い。理由は、経済的余裕であると考えられる。また、(2)の分析、2017年調査の、男女別の分析から、就業している方が、ダブルケア経験確率が高い、という関係は、女性のみに見られる。つまり、男性に一定の経済的余裕があることが前提で、加えて女性も就業しており、何らかの収入源がある場合にのみ、ダブルケアを引き受ける余地が生まれるのではないか。

とはいえ、(3)の結果が示すように、ダブルケアの負担は決して小さくない。(3)の分析で分かった要点は三つある。一つめに、女性の方がダブルケアの負担が大きいと答える傾向にある。ただし、その傾向は、子育てのみ経験者の予想を表す2017年調査の方で顕著である。男性の子育てのみ経験者がダブルケアについてやや楽観的に考えているのか、あるいは、女性の子育てのみ経験者が悲観的に考えているのかは分からないが、実際にダブルケアを行う際の負担については、予想するほどの男女差は無いことは確かである。二つめに、末子の年齢、要介護者の要介護度といった要因はダブルケアの負担に影響する。どういった場合に育児や介護の労力が大きくなるかを踏まえると、妥当な結果である。三つめに、2017年調査の結果を中心に、頼りにできる相手が多いほど、「ダブルケアの負担が大きい」と答えている傾向が見られた。2017年調査は、ダブルケアの負担に関する予想を表している。ということは、この結果は、逆の因果関係を反映したものと解釈できる。つまり、「ダブルケアは大変そうだ」と考えている者ほど、多くの相手に頼りたいと考えているのだろう。2018年調査でも、一部、頼りにできる相手が多いほど、「ダブルケアの負担が大きい

（大きかった）」と答えている傾向が見られた。この結果についても、「ダブルケアが大変だ」と思えば思うほど、多くの相手に助けを求めるということを意味していると考えられる。

最後に、本研究と今後のダブルケア研究に残された課題について述べる。まず、本稿の分析はデータの制約により、ダブルケアが人々の行動に及ぼす因果的な効果を検証するには至らなかった。ダブルケアの「逆の因果」性について言及した結果を解釈するには、ダブルケアになった正確な時期や、その前後において就業状況や負担感がどのように変わったかについて個人の複数時点の状態を記録したパネルデータが必要になる。

次に本研究においては、ダブルケア経験者として「大学以下の子ども」を育て、かつ、実親または義理の親を介護している者を対象として分析した。ただし、ダブルケアの様相は多様であることは、相馬・山下（2013）において指摘されているところである⁽¹¹⁾。例えば、子育てがダブルケア従事者の行動を制限する度合いは、その子どもが未就学児であるのか、それとも就学の子どもであるのかで、異なることが予想される。また、介護についても、介護者と被介護者がどのような関係性であるか、同居の有無などで、負担の感じ方は異なるであろう。例えば、同居する親が健康である場合は、子育て負担の一部を担ってくれるであろうし、同居する親が介護を必要とする場合は、ダブルケアとなって介護者の負担を増大させるであろう⁽¹²⁾。今後はダブルケアの多様性に着目し、子どもの年齢や親の要介護度、そして血縁関係などを考慮した、きめ細かい分析と、各ダブルケア従事者の負担と、その負担に応じたニーズの把握が求められる。

（かみむら・かずき 甲南大学マネジメント創造学部准教授）
（なかむら・りょうすけ 福岡大学経済学部講師）

【謝辞】

本稿はソニー生命保険株式会社、相馬直子氏、山下順子氏による共同調査において収集された個票データを用いている。また、名古屋学院大学における「ダブルケア合同研究会」にて伊沢俊泰氏、玉川貴子氏、研究会参加者の皆様から貴重なコメントをいただいた。ここに記して、感謝申し上げます。

【補遺】

本研究は日本学術振興会科研費（基盤B）「東アジアにおける介護と育児のダブルケア負担に関するケアレジーム比較分析」（24310192）、「ダブルケア責任の世代間ジェンダー比較分析：自治型・包摂型の地域ケアシステム構想」（16H03326）、横浜国立大学経済学部アジア経済社会研究センター助成研究の成果である。

【参考文献】

- 浅野いずみ（2018）「ダブルケアの概念に注目した家族介護者支援のありかたに関する研究」『目白大学 総合科学研究』第14号，pp.1-10。
黒田祥子（2014）「中間の年齢層の働き方——労働時間と会議時間の動向を中心に」『日本労働研究雑誌』No.653，pp.59-74。

(11) NTT データ経営研究所（2016）においても、ダブルケア関連の個々の研究における定義に相違があることが指摘されている。

(12) 本稿においても両親との同居がダブルケアの負担感を変えるかどうか追加的に分析を行ったが、同居が負担感に与える影響は限定的であった。このことは、単なる同居だけではなく、親の健康状態にも注意を払った詳細な分析が必要であることを示唆している。

- 南拓磨 (2018) 「ダブルケア状態の要因分析—— 社会・経済的属性と地域サポートに着目して」『政治経済学研究論集』第3号, pp.111-122。
- NTTデータ経営研究所 (2016) 『平成27年度育児と介護のダブルケアの実態に関する調査 報告書』
http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/wcare_research.html (最終アクセス2019年10月29日)。
- 澤田景子 (2019) 「ダブルケアに関する研究の動向」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第56巻1号, pp.95-115。
- 相馬直子・山下順子 (2013) 「ダブルケア (子育てと介護の同時進行) から考える新たな家族政策—— 世代間連帯とジェンダー平等に向けて」『調査季報』Vol.171, pp.14-17。
- ソニー生命株式会社・相馬直子・山下順子 (2017) 「NEWS LETTER (調査レポート) ダブルケアに関する調査2017」https://www.sonylife.co.jp/company/news/28/files/170317_newsletter.pdf (最終アクセス2019年10月29日)。
- ソニー生命株式会社・相馬直子・山下順子 (2018) 「NEWS LETTER (調査レポート) ダブルケアに関する調査2018」https://www.sonylife.co.jp/company/news/30/files/180718_newsletter.pdf (最終アクセス2019年10月29日)。
- Cravey, Tiffany, & Aparna Mitra (2011) “Demographics of the Sandwich Generation by Race and Ethnicity in the United States,” *The Journal of Socio-Economics*, Vol.40, Issue 3, pp. 306-311.